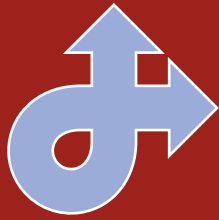


新制作
SHINSEISAKU



Vol. 62 / 2011
新制作協会 広報誌



PAINTING
SCULPTURE
SPACE DESIGN

第75回記念新制作展開催

未来へ-表現のちがいを超えて- 六本木・国立新美術館 2011・9/14~9/26



PAINTING



第75回記念展賞牌 / 佐野ぬい「ひとつの青」



SCULPTURE



第75回記念展シンポジウム



SPACE DESIGN



第75回記念展三部合同展示



絵画部審査・陳列報告

絵画部審査陳列委員長 西田 周司

審査のはじめに会員の皆さんに2つの事をお願いしました。1つ目は審査は厳格にしましょう。厳格な審査が会の体質を表現するように思ったからです。2つ目は将来を担う人を選んでください。今の完成度は遠く及ばなくても何かしら大きなものを感じられる人を選んで欲しい。一見矛盾するような事を（私はそうは思っていませんが）お願いしました。厳選の新制作？と云われるほど今までも厳格にしてきたわけですから方向性に変更はありませんが2つのバランスの妙が創立会員の先見性だと思ったのです。

幸い1100点に届こうとする点数が応募され、昨年と比べて1割増です。世間はまだまだ新制作に期待しています。期待がある間に何とかしないとイケません。今年の審査からポタン式の審査が導入されました。シビアな数字が出ると予想しましたが、想像以上の厳しい結果でした。すべての結果が正しいとは思いませんので導入には色々工夫が必要だと思いますが、今

の新制作の現実も反映してると思います。2点入選が一人も出なかった事、一段掛けを旨としていますので展示に限りがあった残念ながら落選した人、3部合同展示があって絵画部の展示スペースが1室減った事を考えると昨年並みの283点入選は微増と考えて良いと思っています。

展示については皆さんの妥協に寄り掛かっている部分が多いので不本意な陳列と感じられた方には謝らないといけません。会員一人一人が自己表現が出来るスペースを確保する為ブースを大きく取り、若手、中堅、ベテランが外に向かって発信出来れば願っています。特に3階の1室には5年以内の会員を集め新しい絵画部の方向を入場者に判るようにしました。新会員は昨年と同数の3名で、新作家賞8名、絵画部賞9名と久しぶりに多くの方が受賞しました。新制作に出品すれば必ず良い作家になれると云われる様な会に成りたいと願っています。



<三部合同展示>

【絵画部】

上岡真志・高城正俊・竹内一・田村研一
沼本秀昭・藤田邦統・武藤博美・渡辺恂三

【彫刻部】

大野匠・奥田真澄・加藤裕之・瀧徹・細田修己・増田岳人・森克彦

【スペースデザイン部】

今村敬子・片岡葉子・杉田文哉・福井一真・若松美佐子



彫刻部公募作品審査報告

彫刻部審査委員長 石川 浩

今年度の審査は、9月2、3日の会場審査に先駆けて、デジタルデータ審査が8月21日に行なわれました。出品状況は応募9名、出品点数11点、入選7名でした。会場審査出品状況は、応募79名、出品点数112点、入選67名でした。

大震災、大型台風の影響もあったのか、出品者、出品点数が減少、これは他の公募団体にも見られたことと聞いています。

審査は例年同様、出席者の過半数以上の賛成挙手によって入選作が決定されています。新制作協会彫刻部の審査方法として今年3回目であるデジタルデータ審査では、作品を写真撮影する際の技術的問題がありそうなものが何点もあり、立体のデジタルデータ審査の難しさが話題になりました。広角

レンズで撮影されたものとおもわれる作品については、実際にはこんな風になっていないだろうといった意見が出ていました。デジタルデータで応募する際は作品の忠実な再現にもう一工夫をお願いしたいものです。会場での審査においても、様々な意見・議論が出る中で進行了。多くの思いが自由に飛び交い、なかなか先に進めない場面も多々あり、この光景は新制作協会たらしめるものと、委員長としては大いに満足しました。諸先輩が守り継いできたものが厳然として受け継がれているのです。

今年も彫刻部の会場はずばらしいものになったと思います。

スペースデザイン部審査・陳列報告

スペースデザイン部 田中 遵

今年は、三部合同展示が行なわれ、スペースデザイン部から今村敬子、片岡葉子、杉田文哉、若松美佐子、福井一真の5名が参加しました。このためか、作品観覧者から、今年のスペースデザイン部の展示スペースはゆったりとした印象を受けたという感想がありました。

今年の応募者数は89名、応募点数は98点となっており、昨年と比較して前者が2名、後者が7点増えたこととなります。

スペースデザイン部は、作品審査対象に一般作品以外にミニチュール作品を加えたことで、新制作展へ挑戦してみようとする作家が増えたように思えます。今年の日本は地震により様々な厳しい状況が続いていますが、作家達が活動を続けることが見られることは嬉しいことです。

入選数は、昨年の54点に対して55点となっており、初入選

選者数は19名、再入選者は33名となっています。陳列後の受賞会議では、新会員1名、新作家賞受賞者4名を決定しました。

今年も展示室にて行われるギャラリートークの他に、3階の研修室にて〈素材と表現〉をテーマとしたレクチャーが催され多くの人々の楽しそうな顔を見ることができました。

最後に、前々回より作品写真販売を始め、前回からスペースキューブという10cm角の透明なアクリルケースに納められたグッズ販売を始めました。今年のグッズ販売は東日本大震災の被災者を応援する為にチャリティグッズとしました。チャリティグッズの販売は観覧者の方々にも賛同していただくことができたと感じられ、今後も何らかの形で続けていき、スペースデザイン部が社会に貢献できれば良いと思っています。

絵画

●特別展 昭和モダン「藤島武二と新制作初期会員たち」展

絵画部特別企画「昭和モダン 藤島武二と新制作初期会員たち」展が2011年10月15日～2012年1月9日迄、神戸市立小磯記念美術館に於いて開幕しました。

創立から四分の三世紀を経て、新制作はその時々様々局面に対応して発展して来ました。今日新制作のみならず公募団体展はそれぞれ難問を抱えて新しい曲がり角にあった筈でした。今その旗揚げの頃を伝える作品群を見る機会を得て、我々は今更の様にこの会に居てよかったですその幸運に気付かされる思いです。我々は昔の歴史を詳細に知るものではありません。それでもその頃の理念とか信条の様なものは今も会の隅々に流れて居る会の構成や展示の方法、賞の在り方などにその反映をみる事ができます。我々はそうしたどこか新鮮で清々しい魅力に惹かれてこの会に集ったのであります。改めて本展のためにご尽力を下さった諸関係の皆様にご挨拶申し上げます。

特別展図録渡辺委員長挨拶文より抜粋



神戸市立小磯美術館



オープニング/右から二人目は松浦安弘会員



会場：正面の大作は小磯良平/働く人びと

彫刻

●森林保護彫刻シンポジウム

73回展の「彫刻の現場・発表の現場」で「公募展は出品者数だけで質を計るのではなく、社会に対してどのように関わっていくかが重要である」がテーマでした。企画委員会では、現代社会における新制作協会彫刻部のあるべき姿を討論して参りました。

74回展では、彫刻の新たな可能性として、ポリアにおける国際彫刻シンポジウムの参加報告と森林保護の現状を紹介しました。翌年、会員の池田雅彦が「第3回ポリア国際彫刻シンポジウム」に招待され、また、FSC(森林管理協議会)から2011年9月に開催される「FSC森林サミット2011in山梨」での協力の要請がありました。

75回展では、この2つのプロジェクト「第3回ポリア国際彫刻シンポジウム2010」「FSC森林サミット2011in山梨」の参加報告を彫刻展示室で開催となり、参加した池田雅彦氏と、主催者で環境や社会と芸術活動の非営利団体「マンサーナウノ」の理事のファン・プステージョス氏を招待し、パネルディスカッションを実現しました。

「FSC森林サミット2011in山梨」では、山梨県内のFSC認証材を使い、10日間の日程で甲府駅北口広場と山梨県立大学で公開制作をしました。参加作家はファン・プステージョス氏、彫刻部会員/梶本良衛、岩間弘、川村兼章でした。ワークショップでは制作中に出た木っ端を使い、日比野知三・本田悦久の協力で地元の幼稚園児70名と共に「ペンダントを作る」を開催し、創る喜びを分かち合いました。地元メディアもテレビや新聞を通じPRして頂きました。

国際的な自然保護プロジェクト参加は、社会との接点を増やし国際交流を深め、世界の自然保護活動に貢献することが大切な社会への役割の一つと考えています。



パネルディスカッション



住田町の多田欣一町長に寄付金を贈る川村兼章会員

●チャリティ

東日本大震災復興支援としてドローイングと立体作品によるチャリティを(株)竹尾の用紙協力得て計画致しました。支援先は岩手県住田町。大船渡・陸前高田市に隣接し、町のFSC認証林の木材を使い仮設住宅を建設している地域。10月25日に住田町の多田欣一町長に彫刻部川村兼章が赴き全額を寄付致しました。多くの御支援とご協力を頂き、深く感謝申し上げます。

スペースデザイン

●レクチャー「素材と表現」

9月17日(土)美術館3F研修室にて会員3名によるレクチャーを実施致しました。

毎回ギャラリートークやレクチャーを企画してまいりましたが、今回は、第75回記念三部合同展示に出品メンバーに発表していただく企画を準備しました。

テーマは「素材と表現」。福井一真、若松美佐子、杉田文哉のこれまでの各々の空間作品から制作プロセスについて詳しく振り返って頂く内容となりました。スペースデザイン部の展覧会場では「この素材は何ですか?」「どのような工法過程で仕上がるのでしょうか」といった質問が多くみられ、作品に使用した素材や加工部材を直に触ったり、スライドで制作過程を観たり、参加された方々は更にスペースデザインの作品に興味を持っていただいたのではないかと思います。今後もこのような機会を増やしていきたいと考えています。



レクチャーをする上から杉田、若松、福井会員

新制作を考える - 時代と表現 - 公募展とは？

2011.9/18 (日) 13:00~14:30 国立新美術館 3F 講堂 於

シンポジスト／南 宏 第1部 絵画／渡辺 惇三・佐野 ぬい 彫刻／五十嵐 芳三 スペースデザイン／小野 かおる
第2部 絵画／榊山 祐和・藤田 邦統 彫刻／永津 守・河西 栄二 スペースデザイン／齋藤 学

第1部



南 宏 (みなみ ひろし)

昭和32年生まれ
長野県出身／筑波大卒
ブラハ国際現代美術トリエンナーレ
2008 国際キュレーター
2009年 第53回 ヴェネツィアビエン
ナーレ美術展日本館コミッショナー
等
現在／美術評論家
女子美術大学教授
著書／「豚と福音」「Beato Angelo」
「Santa Maria」等

南 宏 (以下●) / よろしくお願ひします。若手の美術評論家というご紹介ですが、今日の先生方に比べれば、若手でも何でもありませんけれども。(中略) 75回の歴史を積み重ねてきた新制作にあって、初期の頃から新制作という研鑽の場を、他にも団体があつた筈ですが、新制作を選び、人生をかけてこられた。今日はいろいろお話をお聞きできる貴重な経験になるのではないかと思ひ、この役割をお引き受けしました。

75回が長いのか短いのか、創立が1936年ですから、昭和11年の2・26事件のあつた年です。ベルリンオリンピックのあつた年ですから一昔な気がします。

今日は〈新制作を考える〉ということになっていますが、新制作という組織は勿論あるんです。じゃあそれは見えるものかという見えないう訳です。あるのは、芸術家として生きる人生を選び新制作という場を選んだひとりの人間があつた。いるということだけであつて、芸術も人生も自分の使命として朝から晩までうまくいかないその絵を描き続けるひとりの人間がいる。木を刻み続けるひとりの人間がいる、その意味を考へることが、今日の新制作を考へるということと同義のものであろうと私はこのタイトルを眺めて参りました。

そんな前提で創立会員の先生方をちょっと下の世代から眺めながら、新制作の場を選び、多くの後進の指導にもあたられている皆さんにお言葉を頂きたいと思ひます。

● 委員長の渡辺先生、この質問から始めさせて下さい。先生はなぜ新制作を選ばれたんですか？

渡辺 / あ、よわつたな(笑)。戦後、いろんな団体が非常に華々しく、どの団体も非常に良かった。二科会も非常に面白い二科だつたし、独立も力があつた。私が出たのは芸大ですが芸大の人間は国画会に行くのが多いんです。そうすると同窓会みたいのに入るのがちょっと抵抗がありますからね。高校の頃に観た団体連合展というのがあつて、色んな美術団体がブースを出して、そこに創立会員もいて、今一押しの新制作はこの人達ですよというのをババ抜きのカードを出すように出してある。その時出ていたのが赤穴宏さんだつたんです。あ、この人がいい、と思つたんです。戦後の風景みたいなものが描かれておりました。倉庫街のね。この展覧会は5年位しか続かなかつたんじゃないかと思ひます。出すならここだと思つて赤穴さんに紹介してもらつたのが高校3年の時、いや浪人中でした。2年目に芸大に入りまして、1956年にやはり新制作だなど、4年の時に初めて出しました。

教室は小磯に行きました。ここが一番自由だつたんです。小磯先生も新制作ですよ。こんな感じでした。

● 当時の海外の美術はどうでした？

渡辺 / いろんなものがいっぺんに入ってきました。今でもはっきり覚えているクラクラッとする位よかつたのがアンドレ・マルジャンの海の太陽という絵で、とっても良かった。これが国際展で観たのか、サロン・ド・メ展で観たのか…。

サロン・ド・メ展というのが来たんですよ。戦時中ナチスの占領下でできた団体のようですが、この頃は日本にもモダニズムはありました。だけど戦争で焼けちゃつて、僕の頭の中しかないんです。それとは大違ひで、戦後は違うモダニズムが始まつたんだというようなね、それと新制作はどっか重なるところがあるんです。他の会がどこか野暮つたく見えて、新制作が清々しく見えたというような感じですね。

● はい、ありがとうございます。サロン・ド・メいうのはおそらく1950年代始めに日本に紹介された美術展覧会？

渡辺 / かもしれません。

● ですね。サロン・ド・メは1943年にパリでできた団体で、秋のサロン・ドートンヌに対抗して、ドートンヌというのをご存知のように野獣派とかキュビズムを出した団体。それに比べ前衛の絵画として春に生まれたのが、サロン・ド・メですね。それに私たちが影響を大きく受けたというお話でした。

それでは佐野先生。3月一杯まで女子美術大学の学長をされ、退官に合わせて高島屋などで展覧会(全国巡回)が開かれましたが、その中に棟方志功の、先生が高校生の時にいただいた手紙を何通か。国画ですよね、国画展に出していてもおかしくない環境だつたと思つたりもしたのですが、なぜ新制作を？

佐野 / 高校の修学旅行の頃、青森なので、ナマの絵画を観たことが無かつたんです。観に行くチャンスですので、他の生徒達は皇居に行つたり浅草でお土産を買つたりしている中、今、渡辺さんが仰つた団体連合展があつて観にいきました。その中で2点、どうしてもその作家が好きだつていう作家が。ひとりは三岸節子さん、もうひとりが荻太郎さんだつたんです。さん付けですいません。その絵ハガキだけ買って、それをずーっと自分の部屋に貼つて眺めていたんです。

棟方志功さんは青森県の人なので知り合ひでした。大学の頃、あの方は荻窪に住んでいてアトリエに遊びに行つたんです。そしたら国画



左から南島宏氏、渡辺侑三、佐野めい、五十嵐芳三、小野かおるの各氏

に持ってらっしゃいよと言われたのですが、棟方志功さんは国画会の会員で、その時お描きになっていたのは油絵だったと思うんですね。「僕は油絵が好きだ」という文章が出てくるんです。でも、私は荻先生と三岸先生と思って新制作に出しました。その時の出品が初入選で1955年でした。大学の頃は公募展に出すなどといわれていましたので、大学を出た年に出しました。

入選の絵は30号です。30号一枚だけを出したんです。誰がどのような絵を出しているかなんて全然気にもしないで出しました。そしたら何処探しても無いんですね。下の方から見て最後にどうしても無いので多分間違いかと。大家部屋と言われる三室がありまして、そこに行きましたら三田康さんの隣に掛かっていました。大家ですとそんなに大きな絵は出されないのでもうご隙間にはめていただいたんだと思います。第19回展で、初出品で初入選でした。

●その頃はこういった偉い先生がいらっしやったんですか？

佐野／その頃はヨーロッパ、アメリカ辺りで学んだ先生が凄く羨ましく、後光が差しているように偉い、というか慕っていました。

そこへ、中山巍先生が女子美にみえました。女子美に入った年にマティス展が上野で開かれまして、動物と同じで一番初めに目にしたのは親なんです。それからぜったいマティスになって、秋にピカソが来たんですがピカソよりはマティスに取り憑かれました。中山先生はマティス派で、そういう傾向の先生でしたのでお習いしました。

●それでは五十嵐先生。キリスト教美術の彫刻家としてご高名ですが、新制作の彫刻は非常に強烈なイメージを私たち世代にも与えている分野だと思います。先生にとっての彫刻そして新制作は、それからまずお願いします。

五十嵐／日本の敗戦を機に彫刻を目指すようになりました。戦時中、川崎の東芝本社に動員され、電波探知機や送信機を作らされていました。モノづくりは大好きで勉強よりも興味があったわけです。ところが、空襲で横浜が全滅、川崎の工場から藤沢に家があったものの焼けた死体の中を歩きな

がら帰って行きました。(中略) 敗戦の思いから私は商業的なものには向かないと思いながら、敗戦直後中学の教師が日展の教育者だった影響もあって彫刻家になろうと思い立った訳です。近所の絵描きさんのアトリエを借り、デッサンを勉強しながら美術学校の入学試験を受けたんです。入学後は自由に粘土で何かを造るとか、石井鶴三先生でした。

新制作も昔の都美術館で開催されるようになりました。当時の新制作展の彫刻はほんの僅かしか無く、絵の会場の一部屋に小振りな彫刻が並んでいる訳です。ところが何となく新鮮な感じを受ける訳です。日展や院展、他団体もありましたが、中でも柳原さんの彫刻。本郷さんや山内さんが抽象がかった具象。船越さんも素朴な彫刻をやられていました。

美校時代、佐藤忠良さんがシベリア抑留から帰ってこられ、私たちのアトリエを訪ねて来られ、良い先輩が戻って来られたというので皆で歓迎したものです。それで新制作が身近な存在になっていました。

建築と一緒に第13回展、絵画の会場と大彫刻室も会場になった年に初出品しました。建築部は図面や建造物もあり、彫刻部も今のような人数ではないですから合同展のような感じで、今年の75回展では三部合同のスペースがありますが、カタチは違いますが、ああいうような三部一体の新制作という印象でした。

当時は殆ど具象彫刻で、头像とか全身像だとか。学校の勉強がそうで、抽象的なものとかちょっと変わったものは無かったですね。海外の色々な展覧会がくるようになって凄く刺激を受けました。具象とすこし違う、変形したり自分の好むようなポーズをとったり、材料を活かしたような形だとか、物を単純化していく…。具象であっても物を単純化していく方式に大変な刺激を受け、素材を活かしながら、自分の表現をしてやってたような気がするんです。

以後、マリノ・マリーニやヘンリー・ムーアの考え方に影響を受けました。ところがこの影響は、なかなか脱却することが難しい。イメージをどのように構築して作品に

していくか、新制作の仲間達もやってきたように思うんです。

私のきっかけは、山口県宇部の野外彫刻展の第一回目に出品したことから、ガラッと。新制作だけで発表しているだけでなくオープンエアーのなかでいかに自分の彫刻を考えようかというところで、ムーアからも脱却できたような気がいたします。

●学生時代の石井鶴三先生、院展彫刻ですよ、これは古いぞという感覚がその頃にありましたか？

五十嵐／石井鶴三さんの物の考え方は今も尊敬しています。石井先生は、できてくる形というよりも、例えば平易な言葉で表すと日本の諺「犬も歩けば棒にあたる」みたいなことを使って表現していました。どうということかと申しますと、モデルと、芯棒に粘土をつける自分、それから自分が居るといふ三角関係が制作行程のなかにあります。絵画の場合は自身が一点に留まって、キャンパスの前でモデルとの対応で描くという。彫刻は前後左右上下があるから自身がぐるぐる廻って物を掴みなさいということだったと思うんです。

院展を観るとユニークな作家もいるんですけど、なんとなく抹香臭いような雰囲気を感じていました。それに比べ新制作はまだ技術的にはそれ程でないにしても若さを感じました。特に柳原さんのは今迄の具象とは違う追求の意欲を感じて大変魅力的でした。

●もうひとつ転換期を迎えた野外彫刻展。今、私が審査員をやってまして、皆さん是非ご出品を。(笑)

それでは小野先生。芸大の油絵を出て、スペースデザイン、当時は建築部でしたがその辺の経緯を。

小野／スペースデザインの前身として1949年に建築部が発足しました。

池田陽さん、岡田哲郎さん、丹下健三さん、吉村順三さん、山口文象さん、谷口吉郎さん、前川国男さん、歴史上の人物がいらっしやいました。一年あけて、剣持勇さん。皆さん大々的に事務所や研究室を持ってらっしゃるような方々です。このシンポジウムにスペースデザインのメンバーとして出演

するにあたって、〈建築部〉が2年で〈スペースデザイン〉に名称変更したのかを調べましたが、はっきりしたことが書かれたものは見つかりませんでした。

戦後の復興で沢山の公募展が建築部をつくりたがっていたことは解ります。この頃「建築基準法」が施行され、鉄筋・鉄骨のビルの高さは31m、木造は2階までの制限。意匠図、構造図、設備図等を役所に提出、許可を受けなくてはならず、建築家は一級建築士、二級建築士の資格が必要になるなど、周辺の様相が変ってきました。

新制作では〈未発表の作品〉ということになっていますから、コンペに出した物の再展示はできません。それで建築と固定せず、材料・マテリアルの研究とそのデザイン作品という意味で〈スペースデザイン〉になったのではないかと思います。

私は、五十嵐先生より2年後に芸大の油絵に入りまして、安井教室で3年間デッサン、デッサンの日々を送りました。安井先生は一水会、梅原先生は国画会でした。

その頃に新制作が再開、観に行くのと、皆はおもちゃ箱をひっくり返した様な会だと言っていたのですが、私はここがいいな、と思ったんです。出すならこごとと思って。

あの頃、そんなおもちゃ箱をひっくり返したと表現された絵画がどんなに新しいか。印象派は袋小路になるから辞めろとか、いろいろ言われていました。それじゃあキュビズムか、モノ派か…。そこで色々なものをやってみるのもいいんじゃないかと。建築にも興味がありましたので、スペースデザインの方で出品してみようかなと…。

私の題でお分かりかと思いますが、子供の伝承物に興味があって、「鶴と亀が滑った後ろの正面だあれ」、そんな不条理な話が面白くて、「後ろの正面だあれ」というのは何作も。全部子供の話。子供の頃に覚えた話というのを今でも読んだり書いたりしています。

今まで樹脂で作っていたものは15キロぐらいあって、今年のはやっと2.5キロになってほっとしています。そんな状況で今作っています。

●それでは先生方の出品作品に対する当初の思い、途中でこれどうも違うぞ、という、新制作に対しての若き日なりの悩みですとか、思い違いだとか、あるいはもっとこうあるべきではないかといったエピソードがありましたらお願いします。

渡辺／この作品は58年ですから、出品して3回目で2回目の受賞になります。ご覧の通り「仏滅」という題名で、当時1年間位お寺にお邪魔したことがあるんです。下は葬式用の幕が途中から紅白の幕になっていく…。お寺での経験が面白く、できたばか

りの本堂、真っ黒に焼けた中に金ピカな祭壇だけがあったり。鳩が巣くってまして、それを坊さんが空気銃構えて撃ち落とすんですよ。実に上手でね、ピシッというね、これがこだまするからツツテテとなって鳩がポトって落ちる。「これどうするんですか?」「裏の墓地に持って行ってなんまいだぶと捨てる」とかね。ああ大変、仏滅だと思って描いたのがこの絵ですね。ご覧の通り具象的です。芸大を57年に卒業ですけど、56年に最初に出品したのもこんなような手合いです。

アンフォルメルがきてすぐかぶれた連中もおります。私もおぼれそうになりましたけれど。まあ、「俺をまってるぜ」というような調子で、少し遅れてかぶれるという具合です。そういう連中は卒業出来なかったり、喧嘩したりと元気のいいところをみせたりするんですけども、我々の時にもその仲間はいました。あ、話がそれましたか? その流れに沿ってやっちゃって、そしたら卒業制作は人間を描かないといけない課題だったんです。私を含め絵が出来上がった頃やっと気が付くような連中で、これは反抗しているんじゃないかと、素直にそうやっていってしまったんです。で、どうしよう、人間じゃないと受け付けなくて、非常に困ったんです。

人間の条件という小説…。アンドレ・マルローの方ですよ、五味川純平さんのじゃない。当時評判だったマルローの人間の条件や人間の絆という題をつけちゃったりしてね。我々の時には急に学校も対応できないものですから、それでいいことになっちゃいました。

次の年は右も左も豊作だった年で、我々だけの悪知恵で課題をこなしていました。学校ではそれじゃいけない、人間の形を描かなくてはならないと。散文的になったねとみんなで言っていたんです。生徒と先生でずいぶんやりあったりして面白い話がたくさんあります。

次の作品は83年の制作です。ヨーロッパから帰って来たばかりです。10年近く行ってました。慈愛というパターンは、きまった聖母がいて、悪人もみんな聖母の青い服に入れば救われちゃうんです。私の見た中では15人入っているのが最高ですけど、これはずいぶん多い。普通は3人位。寄進者が端っこの方で…。この絵ではわいわい乱痴気騒ぎをしている。娼婦が客を誘っている絵があります。娼婦は犬を抱いているんです。映像がぼけてるけど、犬をどけると何も着ていない、非常に大胆なところが彼女らのいいところですね。やがてこの二人もこの中に入って行くでしょう。罪を犯して。そうすると聖母もこんなに一変に救えない、かなり苦しんでいるわけです。

大分色が派手になったでしょ、でも中身は同じじゃないですか。派手になったのは色が使えるようになったから。やっぱり白黒の方が安いですから、安い物を選んでいたら、ホントは色が使いたかったんです。

●それでは、佐野先生お願いします。

佐野／新制作青春時代というのが私にもありまして。会員になった頃かしら、上野の美術館あたりをちょこちょこ歩いていましたらね、後ろからタクシーがきて、そこからスッと手が出てきまして、私を抱きかかえるようにして車に。車内には本郷新先生と、船越保武先生とその他どなたかが乗ってらしたんです。その先生方と行った先は銀座の一流のクラブなんです。そういうことの方が新制作に繋がっているのかもわかりませんね。

作品ですが、これ向きが逆さまですね。まあ、逆さまに観ても私は別にいいことないです。ある時、お求めていただいた方で美空ひばりなんかを撮っている内出監督さんが、飾るところが無かったが、いいところ見付けたからお出で言うので行ったんです。そうしたら安楽椅子に座らせて、椅子をピョイっとうやたら天井に掛かってました。その時、私はそこから見てこりゃいいやと思って。その人その人の見方でいいと。

次の作品も今度は横ですね。横の絵が縦になってるんです。私はそういうことでも全然気にしません。今観るとこれはこれで何処かの雑誌に載せてもいいかなあみたいと思う位で。ただこの一番上にある赤、こういうカタチなんかは自分の頭から出て来たのではなくて、今でいうどっかからパクってるんですね。それは陶器でいう緑と白のなんていうんでしたっけ? すぐ出て来ないんですけど。焼き物にいろいろ抽象的な模様が入っているんです。その模様をとって、適当にはめ込むわけです。私は描くところより、描かない空間の方が好きなもんですから、そういうことではこの空間はよく空いていますね。これは最初の新作家賞ですか。これから三度くらいこういうようなことをやりまして、69年に会員になりました。本郷さんたちに連れられていったというのが今でもゾクゾクし、考えるといい気分でございますね。

●良い物は縦でも横でもよいと。佐野先生の物言いというのは、私が一番最初に勤めたいわき市立美術館準備室の尾崎先生が、横でも縦でもよいものはよいと同義語ですね。ダメな物は縦でも横でもだめだと。これぞ新制作の本質ではないでしょうか。

では五十嵐先生。

五十嵐／これは会員になってからの作品です。先ほど上野の話をしましたけど、その後粘土で作るだけでなく、例えば発砲スチ

ロールを原型にして、アルミの鋳物にしたり、鉄の鋳物にしたり。普通の美術鋳物屋さんでなく、川口の工業鋳物屋さんに行って作ったものです。右の作品はローズウッドの塊を斜めに裁断して組み合わせるようにしたんですけど、中は無垢の鉄の鋳物を2つジョイントしました。片方は反対側に取付け、片方は材木の部分にごついネジで取付け、最後に2つをスライドさせてこのようなカタチにしました。行程は大変だったんですが一つの「種」というカタチになりました。

「種」というのはゴッホの種まく人とか、アンドレ・ジイドのキリストの物語の中にある「一粒の種地に落ちてしなずば」というキリストの象徴みたいなことでもあり、種の中にある生命みたいな、命のもとですね、それをいろんな素材を組み合わせるで作ろうと思ったんです。左側は大木の根っこの部分を輪切りにして溝を作り中に幾つかの鉄の塊で、2つに分かれているんです。

これは石膏の原型で、工場でいくつも吹いてもらい家に持ち帰ってグラインダーやヤスリで鉄鋼鍵のようなかたちを作り、組み合わせられるようにしてあります。この部分をグッと外すと全部外れてしまいます。種の集合体でサイインゲンみたいな物です。生命のもとを彫刻にできないかと、木との組み合わせなどでやった時期です。

猪熊さんの奥さんや佐藤敬さんの奥さん、吉田さんの奥さんとか、本郷さんとか、展示会の初日になりますと、彫刻も絵もなくいいところっていうんですか、新制作会員との交流の楽しみがあって、皆でオリジナリティを作り出そうという雰囲気の仕事をしてきたと思うんです。この作品はその時期の試みです。

これは今年の作品です。メビウスの帯という終わりの無い帯です。メビウスという数学者の名前がついた無限大の形です。生命にしても我々現代社会の生活にしても、ものは循環していかなければうまくいかないのはということなんです。

先程の種を2つに合わせたように、以前は「二人」という群像を作っていたんです。2つを合わせることでエネルギーが発生する。電気現象もそうですし生命体＝種もそう。その意味でメビウスの帯の組み合わせにより、何か新しいイメージや形態ができないかと4～5年追求しています。

●たいへんお待たせしました、小野先生。

小野／これは初出品。金色のがちょうが手にくっついてそれにまた皆でくっついて行列というドイツのお話の表現。角度の違う板にエポキシ樹脂を注型にしました。常温で固まるエポキシ樹脂の水平を利用した作品です。高さ厚さの異なるパネルを154枚作りしました。

私が小学一年、昭和12年のころに内田百間が「ライネケきつね」というゲーテの第一作を訳したんです。ライネケきつねというのは悪いやつで、絶対にやられるだろうと思っても上手く逃げてしまう。こんな嫌な本はないと思ったまま40、50年、私にずっとついて回るから、とうとう作っちゃえ、と。エポキシ樹脂と高塩青銅粉で、12枚。こんな重い物はもう作れません。

●スペースデザインで先生のようなタイプの作家はあまりいませんね？

小野／絵本の仕事をして60年くらいになります。

●スペースデザインの一つの読み取りとして民衆芸術や文化を？

小野／個人的ですが、東欧の伝承文学や民芸は美しいと思います。私が生まれる前、『大ロシア展』があったそうで、父が買ったロシアの絵本を遺してくれまして、今でも観るのが楽しい。アバンギャルドの時の絵本は参考になりますね。今年の作品はチェコですが、やはりロシアが好きなんです。ロシアとの付き合いは難しく、モスクワには行ったことがあります。まだロシアになる直前のソビエトでしたから、本は無くてもつまらなかったですね。

●先生方がおっしゃったあの口調の裏にある、新制作への期待というものを是非汲み取り頂き、前半を終わりにしたいと思えます。先生方は確かに大先輩ではありますが、それぞれが、新制作を選び初出品された頃に戻ってのお話を伺えた気がしました。

第2部

●続きまして、若手のみなさんの登場です。絵画部から榊山祐和さん、藤田邦統さん。彫刻部から永津守さん、河西栄二さん。スペースデザイン部は齊藤学さんです。

新制作に出品を始められた頃、たぎる思いがあったのでは？何を試そうと思ったのか？お話を伺いましょう。

榊山／初出品は、1983年で武蔵野美術大学の1年の時で殆どが公募展の先生でした。大学院では公募展に出品というのが一つの流れで、新制作では内田武夫先生で創立会員に近い先生。その中に赤穴宏先生もいらっちゃった。内田先生は非常に厳しく、絵画を様々な視点から語られる先生でした。厳しさに透明感を持っていた。

私はこういうところから新制作だとし始めました。ここでなければならぬ明解な決意ではなく、公募展が元気で出品者も多く、若い世代が多く出品する。自分の作品をパブリックな壁に掛けることで作品がどう見えるか…。大抵は出品初めは愕然とするんだけど、客観的に自分の作品をみる作業が大事なことだなと。

藤田／新制作に居るべくして居るなという、渡辺先生や佐野先生とこんなにも年が違う、が、逆にいえば大して差がないというのにながかりしてしまいます。

高校生の時に新制作を偶然観て、そこに荻太郎先生がいました。進学の話になり、ならば知っている荻先生が在籍している大学がいいかという感じです。そしたら彫刻の吉田芳夫先生。デザインの岡田教室もありました。黙々と何かに触れて制作をしているわけではなく、新制作に出すなんて考えてなかった。

初出品は第50回展です。決意ではなく、キリがいいから出せという話になって…。偶然が重なってそうだった。それが新制作的じゃないかと。今が第75回だから、25年も続いたと感心もしているし、もう辞めようかななんて思っているし。でもその時に5年続けて出すとだんだんものが創れるようになると思ったんです。公募展はそのためには必要だと。

●だんだん本気になってきた？

藤田／だんだん本気ではなくて、自分の為に必要だった。ものを創り続けることも、描き続けることも大変で、常に本気なんです。公募展は狭い世界だと思えます。でもその中にいることで自分と向き合うことが出来続けていたのかもしれない。狭めることによって…。

長津／僕は愛知県芸大出身で、当時彫刻の学生で本気で彫刻家を目指す者は、皆新制作に出していたんです。取り憑かれるように新制作に出品する時代が彫刻にはあった。応募数は、今は百数十点と少なくなりましたが、その頃は400、500点と入選は難関でしたが、どうせやるなら一番難しいところに出そうと。実は他の団体からも誘いはあったのですが、新制作じゃなきゃダメだという理屈抜きの時期がありました。一番難しいところに出して自分の好きなことをやろうと。

これは3年前の作品です。大学の頃から彫刻で空間をやるんだということを考えて、平面に段列を作りたいと思ったんです。

次の作品は隙間のところから真ん中で回転してまして、白くなった左側の真ん中のところだけ、四角いところを逆に裏返したものなんです。そうするとねじれ状になっている。そういう空間のことを考えていました。

●50歳代の彫刻をやる人間にとって、新制作は圧倒的な力を持っていました。客観的にみてもそういきっていい。それがどう変わってきたかは後でまたお話を伺いたいと思います。そういうなかで一も二もなくというのは非常にリアリティのあるお話でした。

では河西さんお話を伺います。



左から、南高宏氏、樺山祐和、藤田邦統、永津守、河西栄二、齊藤学の各氏

河西／59 回展から出品しています。この作品は 2007 年二回目の受賞の後、ギャラリーせいほうで受賞作家展に出品した 2m の頭身の作品です。私は筑波大出身で先輩もいらず、先生も二紀の先生でしたので、知り合いのいないレベルの高いところに出したいという気持ちが強かった。自分の作品がよいかどうかきちんとみてもらえて、ダメならダメでしっかり落とす。それが新制作だろうと言う気持ちで出品してきました。

全く知り合いがいない中で始めてきましたが、いろいろな先生方に声をかけていただき新制作に入りました。上手く造ろうとしているとか。鈍く造った方がいいんじゃないか。感動など制作のもとになるものがないければいくら上手くても仕方ないと。他の方の作品を観て感じたり聞いたりしながらやってきました。自分の作品はまだこんななんだという悔しさを今も感じ続けています。一木で作ったものを分解して、違う空間を作ったりして取り組みたいと思いましたが、今年はまた一木に戻って迷いながら続けているというのが全体の様子です。加藤昭男さんが新制作というのは会員も一般もなくとにかく毎年が勝負なんだという話をされ凄く感動しました。そういう気持ちでずっと出している人が殆どだと思います。また来年こそはという気持ちで取り組んでいます。

●新制作で木彫というのはどんな立ち位置なんですか？

河西／木彫は大家の先生がたくさんいる。ずっと木を彫っていますが、色をつけたり、木彫的な木彫じゃないような仕事をしているのでいいのかなという気持ちもあります。自分を信じて突き進みたいと思います。齊藤／新聞紙を使った家具作りをやっています。初出品は 56 回展。木工をやっていました。木の素材の特性を活かした造形研究で家具に発展したりと。

展覧会で実験した後、実際に作る物につなげるには木がもったいないという感覚があって、新聞紙を何かにできないかと思ったのがきっかけ。面白いことに、新聞紙の縦方向の高さは 41 cm なのですが、椅子つてほしいこの高さなんです。これに気付

いて、座れる物を作れないかとしばらく続けています。

なんで新制作かという、小野先生も仰ってましたが、スペースデザインというこのデザインですね、デザインというものは時代とともにその内容が変化していくもの。建築部からスペースデザイン部が変わったように今も変わりつつある。10 年先もどうなっているかわからない。そう思っています。

専門は小中高校の美術教育なんです。その中でもデザインの領域。20 年位前はデザインというグラフィックデザインしか扱っていませんでした。疑問を感じデザインって本当はもっと違うだろうと。手掛かりを求めたかったりとか、デザインという名のもとに集まっている方々と一緒に考えたい。併せて大学院の恩師と、教育大の大学院のご出身ですけど生産デザインを専門にされてた、西村、栗島先生なんですね。お二人が出されているということがあり、新制作に出品を始めて 20 年が経ちました。

●スペースデザインというのは特に生産デザインとかプロダクトデザインですね。デザイナーやアーティスト達の受け皿として貴重な部屋だと。それが今まで日本の公募展のなかにはなかった。建築部が後から新設されたというのは、スペースデザインという枠が今もあるということで、もう一度考え直しても良いのではと思います。

各部の皆さん、率直なご意見良いと思います。新制作は団体をもってない。つまり国から認めて保護なんてして欲しくないという会なんですね。賞も新作家賞だけ。新作家賞という飾り気の無さ、その恐さ。これが新制作の味だと思っていて、受賞をした作家をみるとやはり良い仕事をしている。ただし簡単にはもらえない。新作家賞をもらうまでの苦しみを聞かせて下さい。

樺山／苦しみというよりも、47 回展が初出品ですから、初受賞は 8 年後でした。幾つか賞をいただきましたが、新作家賞をもらった時が今でも一番嬉しかった。知らせの電話を受けた時万歳三唱でした。初出品で受賞される方もいますし、何年もかかる方もいる。それはそれぞれだと思う。私に

とって振り返れば当然 8 年位かかるだろうし、自分を、作品を変え、試行錯誤のなかいろいろな人の影響を受けての受賞でした。茨の道というよりもこれぐらい当たり前だよ。という感じでした。

●途中で泣いたことは？

樺山／泣いたというのは常にあって、なんでこいつでおれじゃないんだ、という。それはみんな常に持っていることでしょう。

会員になり審査に携わるようになると、新作家賞をとる時というのは、同じ絵面でも何か違ってきているという感じが僕はします。絵をどう描くか、というよりも世界をどう見ているかという神聖さがパッと出た時だという気がします。審査を繰り返してその辺のマジックというんですか、何枚も何年も描き続けるわけですからその鍛えられ方は並じゃない。そうするとマンネリ化する部分もある。マンネリの部分を乗り越えて、新鮮さを維持しながら描く、この大切さに気付かされました。

●藤田さんは 25 年続けられて、この先生キツイというようなことがありますか？

藤田／そんなことはありません。いいことしか。先ほど言い忘れましたが、僕らの世代を公募展第 5 世代というらしいですよ。初代は第 1 世代、渡辺先生は第 2 世代。スパッと切れ味のいいことをさりげなく言う。お、かっこいいと言う感じ。僕が初めて賞をとった時、猪熊先生に絵を見ていただいた。衝撃的でした。でかい絵を出品したんですよ。3m30cm 位。全体なんか見ないんですよ。ここ、とか画面の前に指を出して教えてくれました。「ここさえ見れば何とかなる」と。それは今の僕のやっていることにすごく繋がっています。

萩先生に見せた時なんて、エアキャップに被ったまま、逆さとか横とかも関係ないんです。エアキャップ越しにチラッとみてウンとかなんか、分かったとか言われちゃうんです。物としての有り様といいますか、これは理屈じゃない。そういうことを凄く切れ者達がなんとか伝授しようとしてたのか…。

公募展という言い方はボクは凄く嫌な呼び方だと思っています。必ず頭に新制作の、

と枕詞がついて凄く嫌いだし、「公募展なんです。」というのが凄く嫌なんです。ただそういう伝承というか、新制作のことを「正月だね」という先生もいました。一年の中での我々のピークという意味だと思いますが、それを伝承していく、作るということ共有する、そういうパワーなんです。

●それは人間に恵まれたという？

芸術の力というのは作品に現れるんですけど、筆が勝手に描いてキャンパスに描かれるのではありません。人間が作っているという、なにか不思議な力が通って描いている。そういう意味での人間の場としての新制作であると。その匂いが今強まっているのか、弱まっているのかそれが大きな課題かとも思います。

藤田／賞に対する思いはあまりありませんが、自分の作品は賞とれないなと思います。とった時もこんな作品ですけど、右も左も分からないから、分かろうとして一生懸命描いていた。ちょっとずつ、絵ってこんなかもと。今審査する側に廻ったら俺の絵落ちるだろうって感じ。

●永津さんはどうですか？

永津／厳しかったのは入選がカツカツの時代。パーティである先生と話した時、「ああ君の作品は分からん」とこれが一番厳しかった。ダメだとかここは良くないとか言っていたらまだしも、分からんという。新制作は具象と抽象と両方あります。その先生はどちらだったのか正直に仰ったんだと思います。そんななかでもやっていかざるを得ないんだなと感じました。とはいえ、それまでのしがらみで辞め方も分からない。ここまできた以上どうしようもないやというところで賞を頂き、嬉しいというかホッとしたというか。そんな感じです。

●新作家賞、時間はかかった

永津／19年かかりました。自分の考えでなく新制作に合わせようとした時期があり、それが一番酷い時期だった。それをしたら絶対ダメなんで、初受賞の前年は最後の1週間くらいで作品が壊れてしまい出品できませんでした。自分の技量の及ばないことをやってしまった。技量のおよばないことをやらないと、賞はもらえなかったことが印象に残っています。

●新制作らしさ、新制作風というのは言葉にすると存在すると勘違いしますが、1936年に新制作派というのができた当時はメンバーの様式もバラバラだった。ただし権力的な体制に抗するという気概を持った若者たちにおいては、その気概が新制作の根本的ならしさだったと。様式で新制作があるわけではない。おそらく長く出品してもなかなか認められないという人達が一度は落ちる病であると。そんなことをしてはいけないと、常に原点にあり続けるということ

が求められているのだということに永津さんは気付かれていたのですね。

では河西さん。

河西／8年目に賞を戴いたんですが、チェーンソーで切りっぱなしで荒っぽいまま出したり、寄木の跡を1cmくらい空いたまま出したり、絵の具を真っ赤や真っ黒に塗りたいなどやりたい放題していたので、「あの赤さえなければね」とか「木彫はノミで彫らなきゃ」いろいろ言われました。一方で、「そこが良いよ」と励ましてくださる先生もいて、それぞれが思ったことを言ってくれました。色を無くしてみようかなと思ったり、「何つまんなく纏まろうとしてるの」と怒られたりした年月でした。

8年目に受賞できたのは本当に嬉しかったですね。まさかという気持ちでした。5、6年目は悔しくて懇親会場に行けず、そのまま常磐線に乗って缶ビールを飲みながら家に帰っちゃいました。受賞後しばらく去年より良くないねといわれ、また8年か10年くらい賞をもらえないんだろうなと。もうふっきれた、そんな気持ちでいました。

賞については心も揺れ、作品についても迷いましたが、自分の仕事をするしかないなと思うようになってきました。最近はこのなんじゃ駄目だという気持ちがさらに強くなって苦しい時期が続いています。

齋藤／今話していただいた流れでスペースデザイン部が絵画や彫刻と違うのは、受賞の機会であったり、会員推挙のタイミングであったりだと思うんですけど。スペースデザインの求める物とか、立ち位置がどういう所になるかというのは、これからも変わるだろうし、分かりません。小野先生が絵本作家であったり、建築の先生方もいれば、プロダクトの人、テキスタイルの人もいる。いろんなジャンルの方の目を通して評価されるところで、何をテーマにして望もうとするのか悩んでいたんだろうなと今思い出します。

今もそうですが、審査する側になり、或いは運営に携わる中で、自分が何をすべきなのか、新しい課題をどうやって見つけるかが今も苦しい点です。ある程度自分が求めていたところが作品として完結していますので、デザイン的な中に次の課題はどこにあるんであろうと、今も悩んでいます。

●この作品は商品化されている？

齋藤／この作品はスペースデザインのグループ展に出したものです。改良を加え強度的に確かめて別のところで発表してます。量産するにはかなりしんどい。評価を付けると新聞紙なのにこんな値段がつくんだ？ということにもなるので商品化は考えてません。

●スペースデザインは作品化するというところが着地点になってしまっています。そ

れを生活社会に結びつけるという要素が、スペースデザインはもっとあっていいと思います。その意味ではコストもありますが、私たちの住まいの中、生活の中に、人生の中で流通させて生きてくる作品が沢山あると思うんですね。

齋藤／そうですね、多分私もそうなんです。フィードバックは必ずしていると。別のかたちで。どの出品者もそういったことが含まれているのではないかと。

●その辺の可能性はかなりあるかと。

とはいえ大先輩から見れば若手ですが、ある意味いいおじさんになってきている。現代美術の世界に関わってきているわけですが、そんな世界があるわけではなく、アーティストがいて作品があるだけ。けれどもそこには不思議な区分みたいなものがある。

そういうことを意識し、それにプラスアルファの一言を最後にそれぞれいただきたい。

樺山／絵をとにかく描いていく、ということしかありません。社会の中で美術の役割が違って来たんだと思います。きれいな箱に入れてリボンを掛けてないとアートじゃないみたいな考え方があるとしたら、それは限界があります。そうでなく、人間の側というか、社会のもっとベーシックなところに引きずり降ろされてきている。それだけ美術の力が見直されてきている。つまり社会の中で美術が開かれてきている。

一方で若者たちがどのような思考で作品を作っているかということ、造形する厳しさという自分の生を確認する眼差しが閉じているような表現になってきたように感じています。

一方で美術が社会である種の力を求め始められている。若者たちのアートというのは個的で内部的なところに入っていて、閉じているという感じが違ったベクトルかなと。若者にとってはリアルだしカタチで作るのが、現在なんじゃないかと。

それを新制作にからめると、若者が来ないところは収束していくしかない。若者を取り入れていくか、今の価値をどんな風に認知していくかが大事なことだと思う。

新制作は僕らの若い頃からの感覚だとハイレベルで造形の厳しさを問われる会だと思ふ。下手くそは入れないという。だけど今の価値は下手でも人間のもっている魅力があれば一緒に絵を描こうよ、という価値が生まれてきている。どうやってハイレベルにリンクしていくかというのが新制作の課題だと思います。外側に開いていかないと収束していく。それだけなんだと。

藤田／この美術館に移って、会員は4mまで使っていていいとあります。4mで今までやってきたことの総ざらいを、自分のこの体にメスをいれて骨までグーと出したよう

な、そういうむき出しの何かみたいなものを描いてみよう。それは今の話とは逆行しますが、僕の場合非常に内向的（内的）な方向に向かっていて、その決定版みtainなものが含まれているのが昨年の作品。体に例えるとグッとえぐったものを縫合しだしている、人体の皮膚のようなものになってきている。えぐっても絵画なんでものは皮一枚です。

今年の作品はもっと描きたかったんですが描けなくなってきた<時代>になっています。制作の場に、何ミリシーベルトといった放送がどんどん流れてくる。身の廻りは雑草だらけ。地球が皮一枚で変わることに凄く驚いている。ここでこそ何かをもう一度組み立てて作って見なければいけないと思いつつも、結局、出品真近かまでできず、絵の具を塗り…ますます内向的に。僕に出来ることは描いて手を動かして考えるということ。

社会的な状況を見ると、公募展に僕が出し始めた頃は、NHKの日曜美術館があり、新制作展も秋はやってた、なんて話もありました。いまはやってませんよね、アートシーンとか。あの頃は公募展は社会に開かれていた。威力をもっていた。ところが今は閉鎖的な扱いを受けている。しかし、作り手側はまったく変わっていません。我々は描くことで絶えず考え、描くことで考えも変わります。アートシーンは描かなくても考えられるんですよ。むしろ、描かない、作らない方がアートシーンは作れるのかもしれない。

公募展に未来があるかといったら描くことで考える人が集まればいい。それは減らないのでは。急速に先細っていく感じはしませんが、若くて出してくれる人と話すと殆どの人が自分の過去の作品というのを持っている。それが凄く心配なんです。自分をプレゼンテーションしようとする。若い頃は昨日抽象、明日は具象と描いていいんです。そのぐらい表面の新陳代謝を激しく行っていくのがいい。今は映像という分野がでてきて絵画が進まなくなっているのではと思います。そこがポイントなのでは？

●絵を描く、彫刻をつくる。その人口は減っていませんが、公募展の批評が新聞に出なくなり、開かれたメディアのなかで紹介される場が、批評の場がなくなりました。全国的に調べてみるといいと思います。

私は現代美術の作家といわれる方々を対象にすることが多かったのですが、公募展の話になると皆さんムキになります。

公募展を支えて来たのは、地方で美術教育を受けていない、しかし、日々の生きる心の糧として新制作というところに出している、そういう人たちの受け皿が公募展

だった。針生一郎は公募展を徹底的に嫌いましたが、この人ほど公募団体を観ていた人はいません。作品を愛した。だけど人を憎んだ。権力で固まったそれぞれのトップの人たちを憎んだ。それを解放し、芸術を全ての人間に戻した上で作品を審査するということにならなければならない。その次元にもう一度立ち返ったならば、公募展はもう一度復活するだけの質と歴史を持っているということを確認しています。私なりに貢献したいけれど、そういうことに対して作品を皆さんに見せてもらいたい。

永津／公募団体は学会です。専門家と若手が研究しその成果を発表します。閉ざされた世界の中でお互いを評価をしていく意味では学会も公募展も同じ。展覧会はちよつと違う。展覧会は作家とお客、第三者を結びつける場所ですが、一方で公募展はそれがなされていない。彫刻部ではお客さんという言葉ができません。絵画はどうですか？ 新制作公募展の人氣が無くなってきたのはそうした歴史が長く続いてきたからでないでしょうか。

公募展が盛んだった頃、対外的な活動も多かった。大学を作ってしまった人もいますし、併せて教科書も作ってしまった。ボランティアみたいですが、アートビジネスですね。そうした動きにつられ、若い人たちも新制作にきました。そういう活動が無いから停滞が続くのでしょうか。会員を出すだけでなく、アートビジネスをこちらからも発信していかないとならない、そう思います。

河西／公募展のこれからは、正直よくわからない。「別のところでやっていかないとならない」という空気が蔓延しています。そう簡単に捨ててよいものか、本当に無くなるかもしれないと思います。自分の気持ち自体が過去のものなのか？ 自分自身が不安になります。それでもやるしかない。

なんでもない新作家賞だけ論議しその上で価値を問い、それでなくなったらそれでいい、ということを先輩方がいいます。凄い会だと思えます。そこが好きで自分が入ったからいいかという気持ちです。

丸裸でも正々堂々勝負というのが生き残る道でもあるのか、他の会との差別化にもなってるのかなと、とにかく自分でいい仕事を続けよう頑張っています。

●自分たちが作ったから潰してもいいという、そこが新制作のかわいいところですね。危機感をもってやっている。

齋藤／力を取り戻すという課題もあります。幸いスペースデザインは六本木に移り出品点数は増えてきています。ミニアチュール部門を増やしたこともあり、作品が大型化していた時代もあったのですが、そうした中で出しやすい分野を作った効果

でしょうか。今年は残念ながら残らなかったが、地方からの出品もありました。そのなかで新しい材料に挑戦したのも沢山あった。そんな可能性を持った方々が全国に湧いてくる、観てくださっている、広めていくという息吹を感じます。何かあつていなくてはない課題がそこにあるのか。

今年はワークショップを開催し、昨日はレクチャーしたのですが満室でした。小規模ながら外に開き、働きかけるということ、デザインという名前を持つ以上、積極的にやらなければいけないと思います。これはスペースデザインだけではできません。三部揃って共有することに意味があるのです。

●皆さん、先輩からいいものをもらっている。私の率直な意見は、社会情勢などそんなことに一切かまけてくれるな、ということです。作品だけを見せてくれる、それが一番のサービスです。このような時代ですからワークショップもやるべきです。

新制作にきている人はいい作品だけを観せてくれと、それだけの想いで来ているはずですね。それに75年応えてきた。

新制作に何があるのか？ 人間がいるだけだ。観に来る者も何かの団体を背負っているのではなく“私”が“私”を背負って来ているだけなんです。

一対一の関係、ここでぶつかり合う場所、それが展覧会であり、公募団体であり、新制作であると。私の立場でいうのも変ですが、新制作を選び出品するものは、新制作という物を信じるのではなく、新制作初出品時のように信じた自分をもう一度信じ、その繰り返しを新制作というカタチで作品を作り続けて欲しい。それに足りうる団体が新制作なのです。

小島隆三代表委員／それでは、時間がきてしまいました。新制作協会は有意義な第75回記念展を迎え、新たな出発と創立当時の理念を忘れずに、さすが新制作だといわれるような恥ずかしくない展覧会をこれからも開催していきたいと思っております。

新制作協会のマークに託された<前進>と<向上>の精神のもとにこれからも歩ん参ります。どうか皆様暖かく見守ってください。本日はありがとうございました。

※記事中に出演パネリストご本人による、映像（場内スライド映写）による作品解説がありましたが、本文を優先することで作品写真は掲載しておりません。ご了承ください。尚、作品写真は事務局にて閲覧できますのでご連絡下さい。

●取材協力

録音／金子 武志 ビデオ・録音／本田 悦久
音声から文章化／(株) 横浜プリント

新制作

新制作生みの親・育ての親 <6>

絵画部会員 荒井茂雄

皆さんこんにちは。今回は新制作 40 年記念素描集のはじめに彫刻部創立会員本郷新先生が感懐と題して文を寄せています。全霊で力強く語っていますので全文を掲載します。

<感懐> 本郷新

ともあれ 40 年と云う歳月が流れた。長いようで短く、短いようで長い。草創の頃の夢多き若者達もいまや 70 歳台を前後する歳である。それぞれに深く感慨はあろう。

だが年毎に新しく仲間に加わった会員達にとって、わけても歳若い人々にとっては、この 40 年の歳月は同質のものではあり得ない。いわんやその夢に於いて、またその志向に於いても…。

ただ一つここに共通の分母があるとすれば、それは草創の時から一度も消えることのなかった美術に於ける自由とヒューマンイズムの炎と云い得るものではないだろうか。

ここ 40 年の間、ある時は声高に論議し、ある時は激しく反発しつつも自由とヒューマンイズムの精神を尊重し、それからの逸脱を恥じそのことを自戒する姿勢を持続し得たことに、見えざる誇りと自負を抱いていることに老若の区別はないであろう。公募団体新制作の歴史の一こまは、これらを立証して余すところがない。

自由であるべき姿勢を自ら屈し、封建的意識の中に団体精神を埋没させる日本近代美術史の悲しむべき体質が、まだ我々の周辺から消えも去らぬ姿を眼のあたりにする時、我々の燃やし続けてきた自由とヒューマンイズムの炎は、いまや会員相互の良識と研鑽によって、より強くより高く掲げられる要はあろう。少なくとも燃えることそれ自身に積極的な意味合いを感じざるを得ないのである。

いうまでもなく、美術を志す一人の人間は深山に落ちる雨滴のように清澄で孤独である。その小さい雨滴が集まって源流となり、やがて多くの支流と共に河川となる。我々は互いに雨滴

であると共に清らかな水質を保つことで美しい河を夢見ることができる。海も空も木も石も雨滴の清澄をひたすらに待ち望んでいる筈である。

新制作 40 年、我々は技の洗練を希いしつつも、無垢と稚拙の尊さを忘れることはなかった。それは造型の初心とか、発想とか云うよりはむしろ芸術に於ける「技」がその洗練の途上でとかく忘れがちな「心」とか「感覚」とかも云うべきものへの評価と信仰のせいであろうか。技貧しき時には技を憧れ、技豊かな時には技に溺れると云う戒めは美術の中の「技」が内包するもろもろの矛盾と相剋を意味深く教えてくれるのである。これらすべては年毎に開かれてきた展覧会の中でも省みられ、また彫琢を繰り返してきたことではあろう。

無為なる 40 年は有為なる 10 年に劣る。個人にとっても集団にとっても歴史は長きが故に尊いのではない。会の歴史に終着の約束はない。あと 10 年のものか、20 年、30 年のものか今は誰も知らない。だが、集団とあるからには個人的にも社会的にも存在の意義を持ち、常に清澄を保ち、雲炎の絶えることのない集団でありたいと希うばかりである。と。

新制作を深く心から愛し、その想いを語っています。

新制作 50 回展の運営委員長をされた彫刻部の創立会員 佐藤忠良先生が、新制作 50 年史に<50 年の歴史と将来の展望>のテーマで書かれている中に、前記の本郷先生の感懐を引用されている文があり、関連がありますのでここに記載しました。

<50 年の歴史と将来の展望> 佐藤 忠良

「無為なる 40 年は有為なる 10 年に劣る…常に清澄を保ち雲炎の絶えることのない集団でありたいと希うばかりである」。50 年を待たずして逝ってしまった本郷新さんが「新制作 40 年記念素描集」巻頭言の末尾に結んだ言葉でした。

あれから 10 年経って、その思いは全ての仲間の中にそのままにあるだろうと思います。と、あたたかい友情の言葉で応えています。さらに「50 年といえば半世紀。この文字の響きはなにか美術史的な重さを感じさせます。

新制作派協会が 9 名の 30 歳台の画家達によって、日本の美術界にひとつの運動体として投げた一石は、当時この世界の大きな波紋となり、第 4 回展に彫刻部が創設され、13 回目に今のスペースデザイン部が建築部として加わりました。永い歴史の中には日本画部の曲折のことなどがありましたが、それはお互いに運動体として活発な帰結でした。と、新制作の個性的な姿を称えています。

50 年史のこと、遺作のこと、協会の顔とも云うべきシンボルマークのこと、竹田道太郎氏の<新制作協会 50 年概史>のこと、などを記した後に、「記念パーティ、記念品のことなどを含めてまことに慣れぬ仕事でしたが昌違いが顔を寄せ合っては滑稽なほど大真面目な準備の 3 年間でありました」と。

大イベントのリーダーは達成感をさりげなく語っています。

では今回はこれにてお別れです。またお会いいたします。



50周年記念新制作展ポスター

会報/新制作No.60迄掲載いたしました特別寄稿<新制作 生みの親 育ての親>の掲載は広報誌 Vol.61ではお休み致しましたが、今号にて掲載とさせていただきます。

新会員

絵画

河村 雅文

かわむら まさふみ



大学を卒業する年、京都市美術館で初めて新制作展を観ました。非常に精緻で高レベルな作品群は、夜桜に似た鮮烈な輝きを伴って魂に染み渡った記憶があります。翌年自らの作品を並べていただけただけ時は、天にも昇る心地と、稚拙さの故に消え入りたい思いが交錯しましたが、この度はその何倍もの重圧と緊張に打ち震えております。支えてくださいました全ての方々に心より感謝し、更に精進を重ねてまいります。今後とも宜しくお願ひ申し上げます。

1962年 京都府生まれ

1986年 京都教育大学教育学部特修美術科卒

同年、第50回新制作展初入選

第66、74回新制作展新作家賞受賞

鈴木 幸子

すずき さちこ



新制作展を大きな目標に決めて 30年目に会員推挙をいただきまして、とても嬉しく幸せに思いました。本当にありがとうございます。今までご指導いただきました諸先生方、励まして下さった方々すべての皆様へ心より感謝とお礼を申し上げます。会員として責任をになっていけるか不安もありますが、ご教示たまわり、一歩ずつと思っております。「絵は一生の仕事」を胸に秘めて。

1948年 岐阜県生まれ

1970年 岐阜大学教育学部美術工芸学科卒

1981年 第45回新制作展初入選

第61、71回新制作展新作家賞受賞

辻井 久子

つじい ひさこ



私はものの内にある要素とか、内にある抽象的なものなど、そのようなものをかたちにしてと努めてまいりました。これからは、抽象的なものを具体的なかたちの中に見えるよう模索してみたいと思います。

この度は会員推挙を頂きましてありがとうございます。これを機に私の一つの節目にしたいと思ひます。今後とも宜しくお願ひ申し上げます。

1950年 大阪府生まれ

1977年 大阪芸術大学美術学部美術学科卒

1996年 第60回新制作展初入選

第70、72回新制作展新作家賞受賞

彫刻

上松 和夫

うえまつ かずお



歴史ある新制作協会会員に推挙いただき光榮に思い感謝でいっぱいです。若い頃、恩師に「自由に造るといい」と、私やっとな活字にすることができたように想ひます。「自由形」にこだわることなく、自在に変化し進歩することであり、常に新鮮で気の中厳しい事。今迄以上に厳しく取り組む事。そして新鮮であることに何らかの価値を生み出せればと。未熟ですが精一杯生きたいと想ひます。

1950年 静岡県生まれ

1974年 早稲田大学卒

1978年 第42回新制作展初入選

第73、74回新制作展新作家賞受賞

中谷 聡

なかや さとし



「落選者も入選者も同じ芸術に志した者、誰でも懇親会で会員が作品について話してくれます」の一言を胸に、小淵沢駅から急行「アルプス」に飛び乗り、東京に向ったあの日から30年近い年月が過ぎました。以来、私は「新制作展」という家で育てて頂きました。そして、これからは「新制作展」という家で育てて頂きたいと切に願っております。どうか宜しくお願ひ申し上げます。

1959年 長野県生まれ

2011年 愛知県立芸術大学大学院修了

1995年 第59回新制作展初入選

第67、73回新制作展新作家賞受賞

新美 正樹

にいみ まさき



この度は会員に推挙していただきありがとうございます。私は生来歩みがのんびりしているほうなので初入選から二十年掛かっただけの会員推挙となりました。

そう簡単にはこの歩みの遅さは直りそうにありませんが、時間をかけてこれからも一歩一歩前へと進んでいきますのでどうぞよろしくお願ひいたします

1968年 愛知県生まれ

1991年 第55回新制作展初入選

1992年 東京造形大学卒業

第68、74回新制作展新作家賞受賞

スペースデザイン

立花 克樹

たちばな かつき



この度は、新会員に推挙いただき、誠にありがとうございます。改めて支えてくださった全ての方々に、感謝の気持ちで一杯です。

「この場所で自分を試したい」初めて新制作を見たときに、そう感じたことを思い出します。その憧れや感動を、多くの方々に伝えることができる展覧会になるように、今後は会員として精一杯挑戦していきたいと思ひます。

どうぞよろしくお願ひいたします。

1979年 宮崎県生まれ

2001年 第65回新制作展初入選

2005年 佐賀大学大学院教育学研究科修了

2008、9年 第72、73回新制作展新作家賞受賞

新作家賞

● 絵画部 / 8名

小野 仁 良	近藤 オリガ
近藤 弘 子	桜岡 みゆき
田代 青山	田中 直子
中崎 眞佐子	馬淵 哲

● 彫刻部 / 6名

遠藤 丈 太	岡 孝 博
小川原 隆 太	ゼロ・ヒガシダ
人見 崇 子	松本 弘 司

● スペースデザイン部 / 4名

伊藤 順	大石 文
小泉 伸子	高松 恵子



●新作家賞受賞者には、賞牌として絵画部会員佐野ぬい氏制作リトグラフ「一つの青」が授与されました。また、各部で開催する受賞作家展に招待されます。

● 絵画部賞 (※絵画部のみ) / 9名

板谷 諭 使	豊澤 めぐみ
井本 心 一	中川 渉
甲斐 美奈子	藤田 憲 一
杉谷 俊 一	矢吹 幸子
高橋 正 樹	

第75回新制作京都展

2011.10.18(火)～10.23(日)
京都市美術館 於



後白河法皇が大寺・法勝寺を建立した京都市左京区岡崎は、美術館やホールが並ぶ京都の文化芸術の中心地です。昭和8(1933)年11月、天皇即位の大礼を記念して建てられた日本で2番目の大規模公立美術館である京都市美術館もこの岡崎公園内にあります。

京都市美術館に於ける今年の新制作京都展も無事終了しました。最終日の日曜日は快晴、前日の雨で延期となっていた時代祭も開催され、美術館周辺は多くの人で賑わいました。今年は国民文化祭京都開催の影響で、公募展すべてに於いて会期日数の縮小を余儀なくされ、例年の約半分の日数で行うこととなりましたが、例年に比べ、入場者総数が大きく減少することもなく、盛況のうちに終了できました。

会員各位と出品者各位のご協力に感謝するとともに、次回もご協力いただきますようよろしくお願いいたします。

京都展事務局 上岡 真志



京都展会場受付



館内に自然光が差し込む京都展絵画会場



京都展彫刻会場



京都展スペースデザイン会場

第75回新制作絵画展 / 名古屋

2011.11.15(火)～11.20(日)
愛知県美術館ギャラリー 於



新制作名古屋展は、11月15日から名古屋の中心、栄地区にある愛知芸術文化センター8階、県美術館で開催されました。

遺作を含め142点の絵画を展示し、6日間で2,800人の来場者を数えました。

中日新聞には会場風景の写真入りの記事が掲載され、来場者からは新制作のレベルの高さに感心する声が上がっていました。また、第75回展記念グッズの販売も好評でした。

昨年は愛知トリエンナーレ開催の影響で展示スペースが狭められ、少し窮屈な思いをしましたが、今回はゆったりとした展示空間になったのではと思います。

名古屋展事務局 四宮 敏行



名古屋展会場受付



名古屋展会場

第75回新制作絵画展 / 広島

2011.12.6(火)～12.11(日)
広島県立美術館・県民ギャラリー 於



新制作広島展は最初の頃は、会員は大田忠先生お一人で、出品者数も小人数でした。1952年より、デパートの文化催事事業として、広島天満屋で油絵・日本画・彫刻・建築部会員の選抜作品と広島地元入選作で、経費はデパート負担で新制作展の名称で開催されました。

その後、1969年に新築された広島県立美術館で(57、58、59回は美術館建て替えのため中止)、現在まで新制作絵画展の名称で開催してきました。県立美術館での開催は少人数の広島にとって経費の負担にかなり難しいものがありましたが、京都展・名古屋展のご支援でかなりの負担軽減して頂いたお陰で今日まで継続して開催することができました。

この事は創立会員の先生方の<仲間・同士>であるとの志が現在まで受け継がれている賜物であると感謝しています。

広島展は、秋の広島での開催のトップを切る展覧会であり、年の終りを締めくくる展覧会として定着し、新制作ファンも徐々に増えて参りました。

これからも入場者数 5,000名突破を目指して頑張りたいと思います。

広島展事務局 木下 和



広島展オープニング



広島展会場

御礼とお願い…

75 回展の私の委員長の任期も終わろうとしています。振り返ってみれば至らないことだらけでしたが各委員の方々、係の皆さんのお陰でなんとかやりおこせた様です。また、事務所員の矢野さんにも記念展とあって特にお忙しい思いをさせてしまいました。心よりお詫び申し上げます。本当に有り難うございました。

とはいえまだ受賞作家展も残っていますし、川越市美術館の特別展もこれから始まる所です。これは絵画ばかりの展覧会ですが新制作全体の創立に関わるものですので、絵画以外の会員、ご出品の方々も是非ご足労と動員をお願い致したく思っております。

この〈昭和モダン 藤島武二と新制作初期会員たち〉展は、特に前もって図録をお求めになることをお勧め致します。神戸市立小磯記念美術館の廣田生馬氏及び川越市美術館の折井貴恵氏と両学芸員の詳細な解説を是非読んで頂きたいのです。新制作がワカルのです。〈百聞してから一見するにしかず〉です。

尚、ひと言添えるなら、川越と云えば同地ゆかりの画家、新制作の故 相原求一朗氏の作品も常陳されておりますので、合わせてご覧下さる様お願い申し上げます。サアあとひと息、ガンバルぞ！

運営委員長 渡辺 恂三



特別展
昭和モダン藤島武二と新制作初期会員たち

川越市美術館 Tel. 049-228-8080

2012. 1/28 (土)～3/20 (火)

9:00～17:00 (入場は16:30迄) 月曜休館

*2/21 以降一部展示替え

会期中のイベント

- 講演「新制作派協会結成とその時代」
2/26、14:00～ 廣田生馬 (神戸市立小磯記念美術館学芸員)
- ギャラリートーク「新制作初期会員作品を語る」
2/11、14:00～ 渡辺恂三 (新制作協会運営委員長)
- ギャラリートーク「新制作初期会員作品を語る」
3/4、14:00～ 田澤茂 (新制作協会会員)
- 実技講座「裸婦デッサンの基礎」
3/11、10:00～14:00 小島隆三 (新制作協会会員)
- 学芸員による展示解説
2/1、3/18、14:00～



特別展図録
A4判 / 135頁カラー
定価 1,500円

特別展〈昭和モダン藤島武二と新制作初期会員たち〉展図録は…
小磯記念美術館・川越市美術館、新制作協会事務局にてお求め下さい。

新協友

新制作協会では、以下の方々を新制作協会協友に推挙いたしました。

- **絵画部** 近藤 オリガ / 近藤 弘子 / 桜岡 みゆき (初受賞・3名)
木滑 美穂 / 奥山 久美子 / 吉成 文男 / 浜本 忠比古 / 渡辺 幸子 (15回入選・5名)
- **彫刻部** 小川原 隆太 / ゼロ / ヒガシダ / 松本弘司 (初受賞・3名)
- **スペースデザイン部** 小泉 伸子 (初受賞・1名)

故佐藤忠良氏を偲んで

去る3月30日に98歳で逝去された、彫刻部創立会員佐藤忠良氏を偲んで、9月18(日) グランドプリンスホテル 新高輪に於いて〈彫刻家・佐藤忠良さんを偲ぶ会〉が営まれました。



挨拶する佐藤達郎氏

第75回記念新制作展祝賀会



祝いの鏡開き / 左から南馬宏、SD部森史夫、彫刻部 大國丈夫、渡辺恂三委員長、真室佳武都美術館館長の各氏



乾杯の音頭の SD部山下勲太郎副委員長



お祝いと賞牌制作の話をする佐野ぬい会員

新制作の歴史を展示



3階入口に展示された歴代の賞牌と会報など

訃報 平成23年11月末日現在

新制作協会発展に尽力された故人を偲び、心よりご冥福をお祈り申し上げます。第76回新制作展の会場にご遺作が展示されます。



安宅 禮子
絵画部会員
平成23年6月24日
享年82歳
肺癌のため逝去

第75回記念新制作展 受賞作家展

● 絵画部

2012. 1 月23日(月)～28日(土) 11:00～19:00

※初日13:00より、最終日18:00終了・会期中無休

会場：銀座井上画廊 Tel.03-3562-1911

中央区銀座 3-5-6(松屋前)井上商会ビル 3F

●オープニングセレモニー 1/23(月)17:00～18:00

●オープニングパーティ 1/23(月)18:00～20:00

※別会場：『えん』銀座店 Tel.03-3538-5496

● 彫刻部

2012. 2 月13日(月)～23日(木) 11:00～18:30

※最終日17:00終了・日曜休廊

会場：ギャラリーせいほう

中央区銀座 8-10-7 Tel.03-3573-2468

●オープニングパーティ 2/13(月)17:00～18:00

● スペースデザイン部

2012. 1 月23日(月)～28日(土) 10:00～19:30

※初日13:00より、最終日17:00終了・会期中無休

会場：建築会館ギャラリー

港区芝 5-26-20 Tel.03-3456-2051

●オープニングパーティ 1/23(月)17:00～19:00

入場者数

第75回記念新制作展の入場者数は…

全日程合計 57,442 人(無料・一般有料入場者合算)

でした。尚、昨年は 44,479 人でした。

新制作協会は、東日本大震災被災地と被災された皆様の日も早い復興を願い、第75回展に於きましてチャリティグッズの販売を致しました。

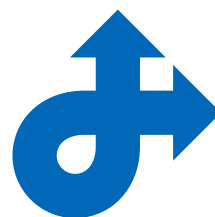
絵画部とスペースデザイン部は、あしなが育英会に彫刻部は、FSC ジャパンワーキンググループNPO 法人日本森林管理協議会の仲介で、岩手県住田町に寄付を致しました。

編集後記

広報誌新制作は、Vol.61号よりデザインを一新して2冊目の発行になりました。今号は特集頁の挿入もあり、全頁カラー化が困難になりましたが、総16頁のボリュームのあるものになりました。

広報委員会では、広報誌・HPを通じ、新制作にご協力・ご支援を頂いている皆様、新制作展にご出品されている多くの世代の皆様と、新制作をまだご存知いただいていない方々にも広く新制作の情報と魅力をお伝えして参ります。尚、次号 Vol.63 は 2012.6月発行予定です。宜しくお願い致します。

広報委員会 / 会報編集委員



新制作協会

〒110-0013

東京都台東区入谷 2-4-2 増田ビル202

Tel.03-5603-8350 Fax.03-5603-8360

URL <http://www.shinseisaku.jp/>

E-mail webmaster@shinseisaku.jp

発行 / 新制作協会

企画・編集 / 広報委員会 広報誌編集委員

林 純夫 大田 雅代 中野 威

製作・印刷 / 株式会社横浜プリント

監修 / 渡辺 恂三

発行日 / 2011年12月20日

広報委員会では、新制作展に関わるニュース、伝言、ご批評、ご意見をお待ちしております。お気軽にお寄せください。

次号(春号/2012.6月発行)をご希望の方は協会事務所迄ご連絡下さい。